

日本語のリズム

萩原 義雄

古代人の歌謡とは

古の人々にとつて己が胸に溢れる自然な思いが呼吸とともに唇を介してほとばしるとき、それが音となり、一つのリズムとなった。身体の運動もそれに伴つて揺らいだであろう。そこに、原始民族に似た歌舞の姿が映し出されもしよう。この衝撃的な音声の一つの意味を持ち合わせたことばとなり、素朴なままでも一種の修辞技巧が取り込まれ、日本語の詩歌として完成していく。ここでは、日本語をリズムに乗せながら最も抵抗の少ない素朴な形態が選択される。このことばの極みのなかで喜怒哀楽を表現するのに、ことば以上に身体運動なる音楽的表現が必要だったのかも知れない。ごく自然に即興性のある単純な五七調と七五調とが組み合わされて歌と成つて響き合うのであろう。

実際、古代歌謡で確かめることのできる資料は八世紀初めに成立した『古事記』以降のものである。ここに素盞烏命が、

八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を

という、五・七・五・七・七の荘重な短い歌が見えていて、これは延喜五年(九〇五)の勅撰和歌集である『古今和歌集』の仮名序においても、「人の世となりて素盞烏命よりぞみそもじあまりひともしはよみける」と云い、『新古今和歌集』の序においても、「やまと歌は、むかし天地ひらはじめて、人のしわざいまださだまらざりし時、葦原の中つ国の言の葉として、稲田姫、素鷲の里よりぞつたはれりける」とある。音の数を以て構成されていることに氣づかされる。故金田一春彦博士は、「拍(音節)の切れ目がきわめて明瞭であること、これはどうやら、日本語の性格の一つらしい」と云い、「このことは日本人が一拍一拍を単位とする文字―すなわち、カナをもつてい

ることに関係があるかもしれない」と云う。即ち、拍の切れ目が明瞭なことばが日本語の特徴なのである。この七五調と五七調のリズムについて、過去にも多くの学識者が討議してきた大きな衆目課題でもある。実際に、詩・歌謡をご自分で創作してみると、

二・二・二・二・二、二・二・二・二の七五調
二・二・二・一、二・二・二・二の五七調

という、四・三か、三・四のリズムが一つの声調となつて表出する。この響き合いのうちにリズムが刻まれていく。

「うたことば」の発生

七五調と五七調のリズムで立て続けに歌い上げていくなかで、枕詞という特別な冠語表現が生まれてくる。青山に

日ひが隠かくらば **ぬばたま**の 夜よは出いでなむ

「ぬばたまの」という語に歌意はないのであるが、この詩句を盛り込むことで、よりリズムミカルとなつていく。この「歌枕」には嘗てはひとつの物語があつたやもしれない。単なる語と語との連結ではなく、本縁譚を介して繋ぎ止めていく仕組みであつたであろう。時が立つにつれ、この言葉の深意を離れて単なる作歌技巧の様式になつてしまつても活かされ続けて行く。音の数を五・七や七・五で調べていく上で、これに当てはまる「枕詞」がふんだんに用いられていくのである。『万葉集』巻第二の内大臣藤原卿(鎌足)が鏡女王に贈つた歌に、

玉くしげ みもろの山の さなかつら さねずは遂に ありかつましじ

には、枕詞「玉くしげ」【玉櫛笥】という、蓋に対する身の意味で「みもろ」の「み」に掛かり、「玉くしげ」みもろの山の さなかつら「までが次の「さね(寝)」に続く序詞という。斎藤茂吉は、『万葉秀歌』のなかで、「そこで一首は、さういふけれども、おまへとかうして寝ずには、どうして居られないのだ」と歌意する。この意味を表現するのに「玉くしげ」「みもろの山」「さなかつら」と麗しき品々や美しい景色を並べ立てて表現する。茂吉は此の歌を

「端的で身体的に直接でなかなかいい歌」という。この歌の精神があればこそ、このことばのリズムが育み出されてきていると云えるのであろう。

もう一首、東国地方の読み人知らずの東歌を紹介しておこう。

吾が恋は まさかもかなし **草枕** 多胡の入野の 何どか吾がせむ

とあつて、「草枕」という言葉の表現を挿入することで、一首のリズム性を生み出しているのである。『万葉集』が荘重な五七調を基調としているのに対し、『古今和歌集』は、流麗な七五調三句切れの歌を多く詠む。そして、枕詞や序詞の技巧表現を脱して、縁語や懸詞を多用していく、比喻法や擬人法も用いられていく。ここには、叙景歌と云つても、現実に見る景色を詠うのではなく、観念のなかで景観を詠むいわば機智を優婉なりズムで乗せていくのである。巻第五秋歌下に見える素性法師の歌に、

もみぢ葉の 流れてとまる 湊には 紅深き 波や立つらむ

とあつて、詞書き「二条の後の東宮の御息所と申しける時に、御屏風に竜田川に紅葉流れたるかたをかけりけるを題にてよめる」という具合に、屏風絵の景観を見ながら詠むのである。

「今様」と云う歌

今様というのは、神楽・催馬楽・風俗・朗詠などに対する、これらより新しき今風の歌という意味である。原則は七五調四句からなり、聲明という仏教唱歌である「和讃」の曲調が影響している。その一例に『梁塵秘抄』の今様歌がある。

ほとけはつねに いませども うつならぬぞ あはれなる 人のおとせぬ あかつきに ほのかにゆ
めに みえたまふ

と白拍子が舞を舞いながら謡いなすのである。この「あはれなる」には、帰依敬仰の寂び寂びとした幽邃な余情を含み込んでいる。

民謡のきまり文句

室町時代になれば、連歌師の活躍が目立ち、柴屋軒宗長が編纂した『閑吟集』なる書が刊行される。早歌という七五調の語り物風の長いものが衰微し、宴曲が誕生する。この宴曲は今様のようなのびやかでゆったりした長伸ばしに歌わずに、早歌でテンポの早い歌い方をする。長編物から短編物へという傾向にある。「隆達小歌」となつて、七七七五の民謡の基礎がここに誕生する。その流行歌謡の集成がこの『閑吟集』である。

はなのにしきの したひもは とけてなかなか よしなや やなぎのいとみ みだれころ いつわす
れうぞ ねみだれがみの おもかげ

というふうには、三四五／三四四。四三三三／二五／四三四という七五調のリズムの変形ではあるが、ことばに則したゆつたりとした自由な音律が生き生きと感ぜられ、最後が四音で終わる、これが中世小歌の大きな特徴でもあった。

おもしろや 京には車 淀に船 桂の川にや 鶺鴒船
という田植え歌らしくない田植え歌が京都府加佐郡に伝わっている。
咲いた桜に なぜ駒つなぐ 駒が勇めば 花が散る

こういう七七七五のリズムが民謡の節に乗っていくのである。

日本語のリズムその2

萩原 義雄

音拍を知ろう

一拍及び二拍の語が日本語の基本語であり、古来日本語と大きく変容していないことば表現である。たとえば、朝の音である鶏の鳴き声「コケッココ」は何拍？
ことばに合わせて両手で叩いて数えてみましょう！

うみ

そら

なみ

ふね

つくえ

では、目をつぶって数えてみましょう。

ピアノ

たいこ

ねずみ

※二歳の子どもが「こども」を「トモ」、「ただいま」を「タイマ」と言ったりするのは音の数をりかいてきていないからです。

次に「あおい うみ」「アオイ ウミ」

「あおい えのぐで うみの えを かく」

ぞう

パン

ケーキ

ねこ

こたつ

こんばんは (こん ばん わ) (こん ばん わ)

うどん

てんぷり

てんぷらうどん

似たことばで、

にじ にじん にんじん

かば かばん かんばん

ちよつと長めの文章で、

「雨天の運転、気をつけて」↓うてんの、うんてん、きをつけて？

「三分間、待つんだよ」↓さん ぶん かん、まつんだよ。

「旅行に行つて、旅館に泊まった」↓

いろいろな音の聞き取り実験

音は、聞き方一つでそれが何の音であるかを私たちは察知することができます。次に幾つかの音の場面状況

を設定するための「聞きなしの音」を用意しました。実音（他に、模写音・人声音）を用意するだけの時間がなかったたので、今回は私が声にだして表現しますのでどのような場面状況音であるかを記録してみてください。では、はじめましょう！

- ① ポツポツポツ ぽっぽっぽっ
- ② タッタッタッタッタッ……カッカッカッカッ……
- ③ パタ。パタ。パタ。パタ。パタ。パタ。パタ。パタ。
- ④ パタ。パタ。パタ。パタ。バタバタバタバタ
- ⑤ タカタカタカタカタカ……カタカタカタカタカ……
- ⑥ カタカタカタカタカ…… タカタカタカタカタカ……
- ⑦ テン、テンテン……テケテン、テン……
- ⑧ トントコ、トントコ、トントントントン、トコトン、トコトン。
- ⑨ トントン、ドンドン。
- ⑩ キンキン、ギンギン。
- ⑪ パタ。パタ、バタバタ。
- ⑫ ペト。ペト、ベトベト。
- ⑬ ポトポト、ボトボト。
- ⑭ ピンピン、ビンビン。

こんどは、様々な笑い方をします。

- ⑮ アハハハ、イヒヒヒ。
- ⑯ ウフフフ、エヘヘ。
- ⑰ オホホホッ。
- ⑱ ハヒヒヒ、フヘヘ。
- ⑲ ホハハハ、ヒフヘホ、ハナ！

※如何でしょうか？……実は、ここにも繰り返しの音によることばのリズムが潜んでいます。このことばのリズムを組み合わせていくと、ことば遊びの世界へと発展していきます。その実例を一つだけご紹介しておきましょう。「尻合わせ」ということば遊びです。

- ① 信州信濃の新蕎麦そばよりも、あたしやあなたのそばがよい。
- ② 亀の甲より年の功
- ③ 男は度胸、女は愛嬌。坊主はお経で、漬け物は辣蕪。
- ④ 驚き桃の木 山椒の木
- ⑤ 蜜柑、金柑、酒の爛、親の云うこと子は聞かん。
- ⑥ ブリキに狸に蓄音機。
- ⑦ あたりき車力、車引き。
- ⑧ こりやたまげた、日和下駄。
- ⑨ かえるがもえる、かえるにすえる、かえるもすえる〈松岡享子『かえるがみえる』こぐま社刊〉
- ⑩ なんのきこのき このきはひのき りんきにせんき きでやむあにき
なんのきそのき そのきはみずき たんきはそんき あしたはてんき
なんのきあのき あのきはあのき ばけそこなつて あおいきといき



〈谷川俊太郎『ことばあそびうた』福音館書店刊〉



この反対もあります。「頭合わせ」

① 瓜売りが瓜売りに来て売り残り売り帰り帰る瓜売りの声

② 歌うたいが歌うたえというが

歌うたいのように歌うたわれたら歌うたいのように歌うたうけれども

歌うたいのように歌うたわれないから

歌うたいのように歌うたわぬ

③ 天王寺の舞々堂から舞を舞えとの毎度の使

前度のように舞が舞えるなら参つて舞も舞いますけれど

前度のように舞が舞えませぬゆえ

参つて舞は舞いませぬ

らくだに のった だるまさん

だるまさんが、……

らくだにのつています。

…じゃあ、らくだになにが 乗っているの？

だるまさん、だるまさん。

じゃあ、だるまさんは 何に乗っているの？

らくだ、らくだ。

そう、「だるまさんが、らくだに乗って らくだらくだ」って。

だるまさんが、らくだに乗って らくだらくだ

だるまさんが、らくだに乗って らくだらくだ

そうしたら、らくだが どんどん かけだしたの！

らくだが どんどん かけだしたの！

らくだが どんどん かけだしたら、

それで、だるまさん、ころころ、ころころ、ころがったの。

それで、らくだが、ころころ、ころころ、ころがったの……。

声は全身でつくりだす

今まで、日本語のことばの音についてことばの復習をしてみました。のどや口、鼻をいろいろに使って音をつくりだします。この場合、音の本と成っているのが、肺から出てくる空気、「息」だということが重要なのです。肺から気管を通して送り込まれてくる息が声帯を振動させて声に成るからです。

よい音を出すためには、肺からたくさん息を送り出す必要があります。また、息の通り道である気管をまっすぐにおかないと、うまく息は通りません。肺から空気を上手に送り出すには、胸やおなかや背中の中の筋肉を上手に使うことです。気管をまっすぐするには、姿勢を正しく調えることが肝要でしょう。そして、「おなかから声をだす」「声は身体全体でつくりだす」という表現が使われるのもこのためです。

実は、身体だけではなく、気持ちの持ち方も、声に影響してきます。人は緊張すると、息がやたらめったら早くなり、喉や口が堅くなってしまう。これでは音の調節ができないのと同じことです。声は内に籠もってしまいます。よい発音とはと訊ねられれば、常にリラックスして声を出すことを心懸けることなのです。

このように考えておきますと、声を出して音を作ることは、実にはたいへんなものであり、むづかしいようにも思えます。けれども、毎日ことばを交わすことによつて、また、意識して練習することで皆さんも次第にうまく声をだせるようになることでしょう！

詩の朗読

竹

萩原 朔太郎

光る地面に竹が生え、
青竹が生え、
地下には竹の根が生え、
根がしだいにほそらみ、
根の先より繊毛が生え、
かすかにけふる繊毛が生え、

かすかにふるえ。

かたき地面に竹が生え、
地上にすどく竹が生え、
まつしぐらに竹が生え、
凍れる節節りんりと、
青空のもとに竹が生え、
竹、竹、竹が生え。

小諸なる古城のほとり

島崎 藤村

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ
緑なす繁蔓は萌えず
若草も籍くによしなし
しろがねの衾の岡辺
日に溶けて淡雪流る

麦の色わづかに青し
旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ

暮れ行けば浅間も見えず
歌哀し佐久の草笛
千曲川いざよふ波の
岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む

あたゝかき光はあれど
野に満つる香も知らず
浅くのみ春は霞みて

はこム【**藜**・**繁縷**】 ナデシコ科の越年草。山野・路傍に自生、しばしば群生する。高さ15〜20センチメートル、下部は地に臥す。葉は広卵形で柔らかい。春、白色の小5弁花を開く。鳥餌または食用に供し、利尿剤ともする。春の七草の一つ。あさしらげ。はこべら。